

## 現代史としてのユーゴスラヴィア紛争——30年後の地平

鈴木 健太(神田外語大学)

### 0 はじめに

- ・歴史教育における「ユーゴスラヴィア紛争」  
世界史や教科書叙述における立ち位置 → 資料1・2
  - 社会主義体制の崩壊・転換、ソ連解体
  - 冷戦終結後の地域紛争・民族紛争の代表例→ ほぼ必ず登場(ただし、当該地域の登場回数はわずか、断片的)
- ・東欧(中東欧、あるいはロシア・東欧)地域へのまなざし  
多文化、多民族的な特性  
民族「問題」の自明な地域のひとつとして  
2022年のウクライナの戦争

#### → 「民族紛争」の典型例としての役割

⇔ 「民族紛争」という図式の妥当性 ← この30年の研究や議論

従来の叙述・説明における欠落、不十分な点

- 紛争の本質的な要因・・・「民族」のちがいはそもそもの問題か？
- 複数存在すると対立する？ 争い合った人びとはどれくらい異なっていたのか？
- 問題に至る歴史的な文脈の欠如・・・現代の見方や決定論ではなく

↓

本発表：およそ30年後からみるユーゴスラヴィアの紛争(解体と戦争)

ユーゴスラヴィアが解体してから30年余りが過ぎた。1989年以降、ソ連・東欧地域が経験した激動のなかで、南スラヴの連邦国家は消滅し、民族ごとに分かれた社会と日常が築かれて久しい。独自の社会主義体制のもとで一時は繁栄を享受した多民族国家はなぜ崩壊し、後の凄惨な戦争がもたらされたのか。一見自明のように見えるその解体と戦争について、また一連の事象を教えることについて、これまでの国内外の研究や議論から、いま一度考えてみたい。

### 1 ユーゴスラヴィアの「紛争」の捉え方

- ・紛争の構図の整理
  - 脱「ごちゃまぜ」論  
国家解体と戦争の混同(≒紛争)  
順序立ててみる必要性：国家の解体に至る過程 → 独立と国家再編に伴う戦争
  - 「対立」の原因と形成  
歴史的、永続的な対立の誇張 ← 紛争の「結果」の自明視  
→ 1980年代の体制危機の打開に向けた見解や改革案の相違  
・・・スロヴェニア対セルビア(≠セルビア vs. クロアチア)

・紛争に至った国家と体制

社会主義ユーゴスラヴィア (1945-1991)

独自の社会主義体制 (「自主管理」「非同盟) ≠ 「東」「西」ブロック

共産党 (共産主義者同盟) の一党体制

連邦制、多「民族」国家： 6 共和国 2 自治州、5 (6) 民族<sup>1</sup>

→ 地図 1, 2

連邦制と 74 年憲法体制

「きわめてゆるい」連邦制、国家連合？

3 つの「絆」： 党、ティトー、軍 (柴、1996 年) 「理念の共同体」(Jović, 2003)

→ 民族の自決とナショナリズムに基づき、民族および 6 共和国 2 自治州に大幅な主権を認めた体制は、それにもかかわらず、少なくとも 70 年代から 80 年代前半にかけて解体する兆しはほとんど見られなかった。では、なぜ解体したのか？

## 2 ユーゴスラヴィア解体

・1980 年代 (とくにその後半) に起こったこと

体制の機能不全と「危機」の顕在化： 経済不況の深刻化、コソヴォ問題

改革をめぐる議論とその齟齬

1974 年憲法体制の是非 (㊟ ㊥：改憲、集権 vs. ㊦ ㊧：護憲、分権)

→ 見解の相違は、88 年頃には民族・共和国ごとの構図へ

・時系列にみる連邦制の最終局面

1989 年 スロヴェニアとセルビアの共和国間対立の激化 (とくに 2 月以降)

1990 年 1 月 連邦党組織 (共産主義者同盟) の崩壊

→ 複数政党制の導入と自由選挙へ (一党体制の終焉)

同 4-12 月 各共和国で順次選挙の実施・・・連邦の選挙は未開催

→ 各共和国で民族 (主義) 的な新政府が成立、㊦と㊧の独自の動き

1991 年初頭 共和国首脳の討議 (国家連合か、連邦再編か) → 挫折

同 6 月 スロヴェニアとクロアチアの独立宣言

同 11 月 マケドニアの独立国としての国際承認を求める決議

1992 年 3 月 ボスニア・ヘルツェゴヴィナの独立宣言

同 5 月 セルビアとモンテネグロ、ユーゴスラヴィア連邦共和国を創設

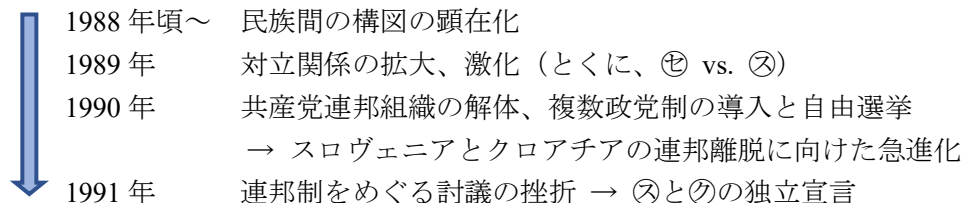
・解体過程の大まかな見取り図——対立の起源と展開

「危機」の打開をめぐる議論の相違 → 対立の形成、拡大 → 連邦離脱 (独立) の動き

争点： 国体・・・連邦制 (中央集権 or 分権化) ←コソヴォ問題

経済・・・自主管理経済 (IMF 主導の改革、88 年の改憲) ←不況の悪化

政治・・・一党体制 or 政治的多元主義 ←制度の転換、「東欧革命」



<sup>1</sup> 6 共和国は、北からスロヴェニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、セルビア、モンテネグロ、マケドニア。2 自治州は、ヴォイヴォディナとコソヴォ (いずれもセルビア内)。5 民族は、スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人、モンテネグロ人、マケドニア人 (68 年に承認されたムスリム人を加えて 6 民族)

一方で、ユーゴスラヴィア的な紐帯の限界と衰退

- 共和国の独自行動を統制できず（改憲、武器の密輸）
- 連邦全土の選挙を実施できず
- ユーゴスラヴィア的な政治勢力の周縁化、弱体化

→ 体制危機下、その打開策をめぐる対立の生成と拡大、社会主義体制の衰退（および「東欧革命」）に伴う争点の増加、ユーゴスラヴィア的な諸制度の自壊など、さまざまな問題が複合的に進行するなかで、解体および共和国の連邦離脱（独立）が選択されていった。

### 3 ユーゴスラヴィア戦争

#### ・戦争の特徴と大まかな構図

さまざまな名称：「戦争」「内戦」「祖国戦争」「攻撃」...

原因と対立軸：

連邦解体と共和国独立への移行に伴う統治と内政の問題

→ 国家再編の最中に、共和国ごとに生じる

3つの戦争

- 91年6月27日～7月7日：スロヴェニアの「10日間戦争」

- 91年6月頃～95年12月：クロアチア内戦（クロアチア人勢力 vs セルビア人勢力）

- 92年4月頃～95年12月：ボスニア内戦（ムスリム、セルビア人、クロアチア人の三つ巴）

国家の正規軍どうしの戦いではなく、新国家内における対立する勢力（民族）間の戦闘  
ウクライナの戦争との比較

#### ・2つの内戦と「セルビア人問題」

クロアチアとボスニア・ヘルツェゴヴィナに居住するセルビア人の反発と抵抗

cf. スロヴェニアの短期戦、コソヴォやマケドニアにおける「アルバニア人」問題

民族自決を掲げた独立 → 自決が自決を生む

新たな独立国家（=国民国家）で民族的少数派となることへの不安、恐怖

↑ 社会主義時代における「諸民族の平等」と民族帰属の重要性

独立反対 → 住民投票の実施、「自治」組織の形成

→ 地図3

独立をめざす共和国内の情勢

帰属国家の「国民国家」化、政治的「民主化」（選挙）後の民族主義政党の台頭

クロアチア：新政府の「クロアチア化」政策、セルビア人に対する差別や抑圧

ボスニア・ヘルツェゴヴィナ：3民族の権力分有の崩壊、各種勢力の民族（主義）化

⇒ 民族ごとの権力や利権の排他的な追求と競い合い

#### ・戦闘の発生と展開

##### - 武器の問題

全人民防衛体制における「身近な」武器

各種民族勢力（独立する共和国、セルビア人「自治区」）の自衛や武装、軍隊形成

##### - 対立の先鋭化

連邦解体／独立の現実化・・・91年6月の独立宣言、92年2-3月の国民投票

調停者の不在：連邦諸機関の形骸化と麻痺 → 統制不能、無秩序状態

##### - 戦争の始まり

混住地域の都市や自治体：民族ごとの分断の進行

バリケード設置、武装化 → 小競り合い → 軍事衝突

ボスニア・ヘルツェゴヴィナの例

90年11月：選挙における3民族主義政党の勝利

ムスリム人とクロアチア人による独立の動き ⇔ セルビア人の反対

独立を問う国民投票（92年2-3月）

投票の是非をめぐる緊張化・・・投票キャンペーン vs. 投票ボイコット

分断の拡大

「通りや職場や学校でも喧嘩や静いが頻発し、酒場での拳銃乱射やバリケードを挟んだ銃撃戦までもが発生した。住民の不安は高まる一方で、武装が一層進んでいった。国民投票当日には、投票所の襲撃事件や衝突がボスニア各地で発生し、サラエヴォ市内でもバリケードが出現し、対立勢力どうしが睨みあった。」（佐原『ボスニア内戦』182頁）

結果：有権者の63.7%が投票、99.7%が独立賛成、セルビア人の多くは拒否

⇒一部の地方都市で、3月中旬から散発的に戦闘が始まり、次第に激化

- 戦争の全体像

ローカルな場における戦禍の多様な様相・・・混住地域の個々の状況による全体の図式

クロアチア：クロアチア軍 vs. 各地のセルビア人勢力（<<セルビア本国、連邦軍）

ボスニア・ヘルツェゴヴィナ：

ムスリム（ボスニア人）勢力

vs. クロアチア人勢力（<<クロアチア本国）

vs. セルビア人勢力（<<セルビア本国）

戦闘の目的とその経過

2民族・3民族それぞれに自民族の領域の維持・確保、また拡大

とりわけ混住地域における苛烈さ・・・民族的な純化＝「民族浄化」

「自主的」な退去勧告から、暴力を伴う追放、略奪、強姦、そして虐殺まで

↑パラミリタリー（非正規兵）の参戦（活用）がもたらした影響

戦争の結果

民族に基づく社会の再編成

民族ごとの棲み分けと分断、多民族的な文化や経験の破壊と減退

・戦争の終結とその後

- デイトン和平協定（95年12月、米国・オハイオ）

クロアチアとボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける紛争の一応の終結

- コソヴォ紛争（96-99年）

99年3-6月：ユーゴスラヴィア連邦共和国へのNATOの空爆

08年2月：コソヴォの独立宣言

- マケドニアの紛争（01年2-7月）

オフリド合意（同年8月）

- モンテネグロの独立（06年6月）

セルビアを含め、連邦国家を構成した6共和国は独立国家へ

4 おわりに——「民族対立」「民族紛争」を超えて

・「民族紛争」の相対化

紛争に至る過程、事実関係の再検討

非民族的要因の重要性

個々の歴史的な文脈の抽出 > 普遍的な問題の典型例

→ 別の普遍的な問題群への照射： 民族の自決をどう達成するか、国民国家建設における民族的少数派の処遇、ナショナリズムが抱える暴力など

紛争が社会にもたらしたもの： 対立の強化・・・民族的分断を固定化する和平協定

・歴史教育における難しさ

限られた時間と紙幅 ⇔ 馴染みのない周縁的な地域、複雑な過程とメカニズム

cf. 大学の現場から

詳述 — 明快さ： なにを、どこまで、どのように教えるか？

現地の歴史教育の現状

ユーゴスラヴィア紛争の影響、その扱われ方、民族間の分断

## 主要参考文献（抜粋）

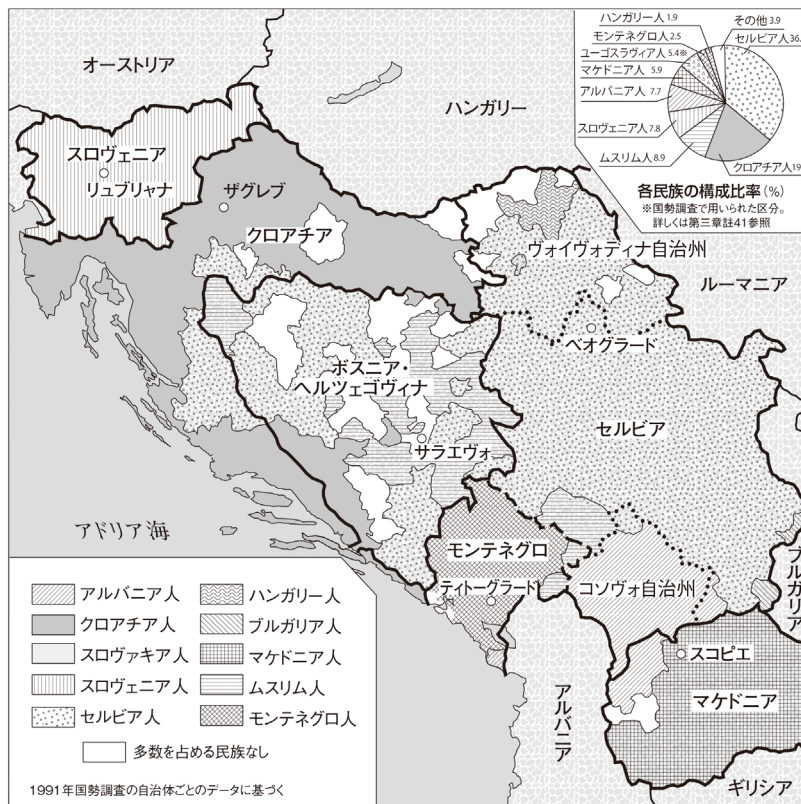
- Belić, Dragan i Đuro Biblija (ur), *Srbija i Slovenija: od Cankarevog doma do „Jugoalata“ i Gazimestana*, Beograd: Tera, 1989.
- Brubaker, Rogers, *Nationalism Reframed: Nationhood and the National Question in the New Europe*, Cambridge: Cambridge University Press, 1996.
- Čolović, Ivan (ur), *Zid je mrtav, živeli zidovi!: pad Berlinskog zida i raspad Jugoslavije*, (Biblioteka XX vek: 179), Beograd: Knjižara Krug, 2009.
- Jović, Dejan, *Jugoslavija – država koja je odumrla: uspon, kriza i pad Četvrte Jugoslavije*, (Edicija Reč: knj. 22), Beograd: Samizdat B92, 2003.
- Kerčov, Sava, Jovo Radoš i Aleksandar Raič, *Mitinz i u Vojvodini 1988. godine: rađanje političkog pluralizma*, Novi Sad: Dnevnik, 1990.
- Naumović, Slobodan, *Upotreba tradicije u političkom i javnom životu Srbije na kraju dvadesetog i početkom dvadeset prvog veka*, (Biblioteka Fronesis), Beograd: Institut za filozofiju i društvenu teoriju / Filip Višnjić, 2009.
- Petranović, Branko i Momčilo Zečević (ur), *Jugoslavija 1918-1988: tematska zbirka*, 2. Izmenjeno i dopunjeno izd., Beograd: Rad, 1988.
- Vladisavljević, Nebojša, *Serbia's Antibureaucratic Revolution: Milošević, the Fall of Communism and Nationalist Mobilization*, New York: Palgrave Macmillan, 2008.
- 久保慶一『引き裂かれた国家——旧ユーゴ地域の民主化と民族問題』有信堂高文社、2003年
- 越村勲・山崎信一『映画『アンダーグラウンド』を観ましたか？——ユーゴスラヴィアの崩壊を考える』彩流社、2004年
- 佐原徹哉『ボスニア内戦——グローバリゼーションとカオスの民族化』（国際社会と現代史）、有志舎、2008年
- 柴宜弘『ユーゴスラヴィア現代史』（岩波新書 新赤版 445）、岩波書店、1996年
- 柴宜弘『ユーゴスラヴィア現代史 新版』（岩波新書 新赤版 1893）、岩波書店、2021年
- 柴宜弘・中井和夫・林忠行『連邦解体の比較研究——ソ連・ユーゴ・チェコ』多賀出版、1998年
- 鈴木健太「連邦解体とユーゴスラヴィア紛争——民族の自決と「セルビア人問題」」（柴宜弘・山崎信一編『セルビアを知るための 60 章』（エリア・スタディーズ 137）、明石書店、2015年、83-87頁）
- 鈴木健太「独立への過程と「十日戦争」——ユーゴスラヴィアからスロヴェニアへ」（柴宜弘、アンドレイ・ベケシュ、山崎信一編『スロヴェニアを知るための 60 章』（エリア・スタディーズ 159）、明石書店、2017年、77-82頁）
- 鈴木健太「連邦解体とボスニア紛争——秩序の崩壊、民族に基づく再編成」（柴宜弘・山崎信一編『ボスニア・ヘルツェゴヴィナを知るための 60 章』（エリア・スタディーズ 173）、明石書店、2019年、76-81頁）
- 鈴木健太「ユーゴスラヴィアにおける 1989 年——連邦解体前夜の変革と対立」（『思想』no. 1146、2019年9月、120-139頁）
- 鈴木健太『ユーゴスラヴィア解体とナショナリズム——セルビアの政治と社会（1987-1992年）』刀水書房、2022年
- 千田善『ユーゴ紛争——多民族・モザイク国家の悲劇』（講談社現代新書 1168）、講談社、1993年
- 月村太郎『ユーゴ内戦——政治リーダーと民族主義』東京大学出版会、2006年
- 南塚信吾編『東欧革命と民衆』（朝日選書 451）、朝日新聞社、1992年

地図 1



地図 ユーゴスラヴィア (1991年)  
出典：鈴木健太ほか『「アイラブユーゴ」』175頁

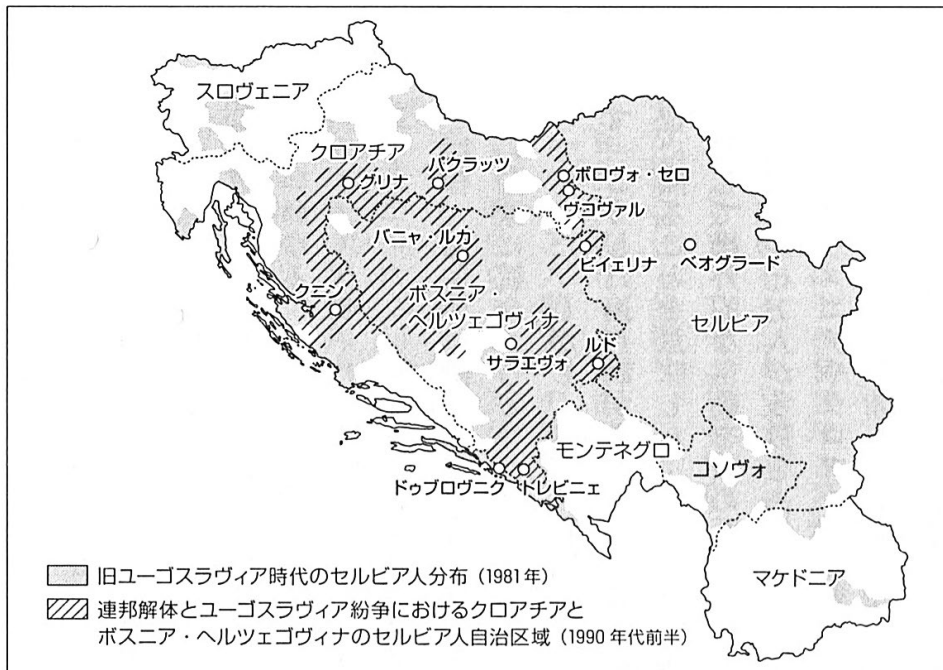
地図 2



ユーゴスラヴィア各地の多数を占める民族の分布 (1991年)

出典：“Former Yugoslavia - Ethnic Majorities,” in *Former Yugoslavia: A Map Folio*, The U.S. Central Intelligence Agency, 1992 (<https://maps.lib.utexas.edu/maps/europe/yugoslav.jpg>) をもとに作成

地図 3



旧ユーゴスラヴィアの領域におけるセルビア人の民族分布と政治的単位

出典：柴・山崎編『セルビアを知るための60章』85頁

### 資料1 教科書叙述にみるユーゴスラヴィア紛争1

○ 木村靖二・岸本美緒・小松久男ほか『詳説世界史 改訂版』山川出版社、2018年  
第16章 現在の世界

#### 1 社会主義世界の変容とグローバリゼーションの進展

##### 東欧の民主化

(・・・略・・・)

##### ソ連邦の解体と民族紛争

(・・・略・・・)

##### ユーゴスラヴィア連邦の解体

ユーゴスラヴィア連邦では、1980年のティトの死や、ソ連邦の解体による共産主義政党の影響力の低下により、90年代になると、連邦の解体が進行した。まず、91年にクロアチア・スロヴェニアが分離を宣言すると、セルビアとのあいだで内戦が発生した。同様の戦闘はボスニアでも発生し、95年11月には独立が達成された。また、97年にはアルバニア系住民が多いセルビアのコソヴォ地区でも内戦が勃発した。99年にはセルビアに対するNATO軍の空爆もおこなわれ、アルバニア系住民の大量殺害への関与により指導者ミロシェヴィッチが逮捕され、国際戦犯裁判にかけられる事態も発生した。

##### 通商の自由化と地域統合の進展

(・・・略・・・)

### 資料2 教科書叙述にみるユーゴスラヴィア紛争2

○ 岸本美緒・鈴木淳ほか『歴史総合——近代から現代へ』山川出版社、2022年  
第9章 グローバル化する世界

## 2 ソ連の崩壊と経済のグローバル化

ゴルバチョフが始めた改革は、ソ連の崩壊へと行き着いた。その後、ユーゴスラヴィアも激しい内戦の末に解体した。なぜソ連は崩壊し、ユーゴスラヴィアは解体したのだろうか。また冷戦後の世界で経済のグローバル化はどのように進展したのだろうか。

### ソ連崩壊

(・・・略・・・)

### ユーゴスラヴィア紛争

ソ連の崩壊と並行して、バルカン半島の社会主義連邦国家であるユーゴスラヴィアでは、民族紛争が激化した。ティトーは各民族に配慮して連邦をまとめあげていたが、ティトーの死後、セルビアのミロシェヴィチなど各共和国の指導者は、ナショナリズムに訴えることで支持を集めようとした。1991年にスロヴェニアとクロアチアがユーゴスラヴィアから分離独立すると、セルビアの影響が強いユーゴスラヴィア連邦軍が軍事介入したが、ヨーロッパ共同体（EC）の仲裁によって停戦した。

ボスニア・ヘルツェゴヴィナでは、事態ははるかに深刻であった。ここではセルビア人・クロアチア人・ムスリム人が暮らしており、民族対立と宗教対立が複雑に重なりあっていた。1992年から95年まで続いた内戦は、民間人への激しい殺戮をともなうものとなった。

ついで1996年にはユーゴスラヴィア連邦のセルビア領内で、コソヴォ地区に住むアルバニア系住民と、セルビア政府とが激しく争う事態となった。コソヴォ紛争に対して国連安全保障理事会は介入を検討したが、中国や、ソ連の後継国家であるロシアは、冷戦終結後に国際政治での影響力を強めたアメリカ合衆国に反発して、武力介入を支持しなかった。そのため、1999年に北大西洋条約機構（NATO）がコソヴォ空爆を実行し、セルビア勢力をコソヴォから追放した。コソヴォ空爆をめぐる経緯は、湾岸戦争においてみられた各国の協調が、束の間のものでしかなかったことを示していた。

### 経済のグローバル化

(・・・略・・・)